

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：32505

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02974

研究課題名(和文)文章の執筆過程の分析に基づく大学初年次生の文章産出能力の実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Study of the Writing Competence of First-Year University Students  
Based on an Analysis of their Writing Process

研究代表者

田中 啓行 (Tanaka, Hiroyuki)

中央学院大学・法学部・准教授

研究者番号：40779774

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、大学初年次生の文章の問題点を明らかにするために、大学初年次生が作文を書いている間にどのような順序で文字を入力したかという執筆過程のデータと執筆した作文に関するインタビューで語られた内容を分析した。その結果、大学生が文末表現、文の長さ、前後とのつながり、内容の具体性、文章全体の表現の統一などを執筆中に意識していることを示した。そして、文章表現に問題のある学生は執筆中に意識している文章の範囲が狭いのではないかと指摘した。また、大学初年次生にとって、身近なテーマであれば必ずしも書きやすいわけではないことを示し、ライティングなどの授業における文章課題の設定に関する示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、大学初年次生が書いた文章だけでなく、その文章を書く過程を分析対象とすることで、執筆時の意識に着目した点に学術的意義がある。このことによって、大学初年次生の文章に現れる問題がある表現を指摘するだけでなく、どのような経緯でそのような表現が生じるのかということを示した。また、文章の執筆者へのインタビューを合わせて分析することで、執筆者がなぜそのような表現を選んだのかを示した点にも意義がある。本研究課題の成果は、大学に入ったばかりの学生への文章表現指導において必要なことを示した点で、社会的意義があるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we analyzed data on the writing process of first-year university students, such as the order in which words were written when writing essays and what students reported in interviews about the essays they had written, to identify issues in their writing. The results showed that while writing, university students were conscious about sentence-final expressions, sentence lengths, connections between successive sentences, the specificity of content, and the cohesiveness of expressions throughout the text. The results further suggest that university students who have issues with written expression might only be conscious of a narrow range of sentences, and indicate that familiarity with the subject does not necessarily make it easier for university students to write on it. Finally, we present suggestions on setting writing assignments in writing and other classes.

研究分野：初年次教育 文章論

キーワード：初年次教育 アカデミック・ライティング 作文教育 執筆過程 文章表現 学術的文章

## 1. 研究開始当初の背景

1990年代から、初年次教育として、レポートの書き方などを中心とした日本語の文章表現やライティングの授業を設ける大学が増えており、近年もその傾向は続いている。それとともに、大学生が書いた文章の分析や質問紙などによる大学生の文章執筆に関する意識の分析の研究成果が蓄積され、授業実践やカリキュラム開発の報告も多数行われてきた。しかし一方で、近年は高校段階の文章力低下が指摘されており、レポートの書き方などのアカデミック・ライティング以前の基礎的な文章力が不足している学生も多い。学生が、基礎的な部分も含めて、自らの文章を改善できるようにするには、なぜ問題が生じているのかという原因を解明し、その原因を踏まえた働きかけをする必要がある。しかし、従来の研究では、文章に表れる問題点と学生の文章執筆に関する意識のそれぞれの分析は行われているものの、具体的にどのような意識がどのような問題点につながっているのかについて、実証的には示されていなかった。そこで、本研究では、文章執筆時のどのような意識がどのような種類の問題点につながるのかということ、「問い」として設定した。そして、この問いを解明し、大学生の文章産出能力を高める方法を提案することを目指した。

## 2. 研究の目的

研究開始当初の背景をふまえて、(1)大学初年次生の文章に問題が生じる原因の解明、(2)初年次1年間における学生の文章の変化の解明の2点の目的を設定した。

### (1) 大学初年次生の文章に問題が生じる原因の解明

大学初年次生の文章に問題が生じる原因を、1)文章に表れる問題点の種類分析、2)問題が生じるまでの執筆過程の分析、3)執筆中の学生の意識の分析によって明らかにする。問題点には、語彙や文法の誤りだけでなく、構成が不十分な点なども含める。

従来のライティング、作文や誤用の研究は、書き終わった文章に対する分析が大半であった。このような方法では、執筆者が何をどのように表そうとしていたのかについて、分析者が推測せざるを得ない。そのため、執筆者の表現意図とは違う意図を推測してしまう可能性もある。この点を解消するために、本研究では、文章の表現・構成の分析に加えて、執筆時のキー操作を記録することによる執筆過程の分析と、執筆者に対して執筆過程を見せながらインタビューをすることによる執筆時の学生の意識の分析を行うこととした。この方法によって、大学初年次生の文章産出能力の問題を、その解決につながる形で解明することができると考えた。

### (2) 初年次1年間における学生の文章の変化の解明

初年次の1年間に学生の文章がどのように変化するかについて、1)入学直後、前期終了時、後期終了時の三つの文章の表現・構成の分析、比較、2)三つの文章に対する教員の評価の違いの分析によって明らかにする。初年次生の文章産出能力がどのように変化していくのかを解明するため、時期を変えて3回文章を書いてもらい、文章の表現・構成の変化、執筆過程の変化、学生の意識の変化について分析する。また、初年次のライティング教育には、大学での学術的活動に必要なアカデミック・ライティングの技術を身につけるためのものだけでなく、高校までの学習内容を補い、基礎的な文章力を身につけるためのリメディアル教育としてのものもある。それぞれの観点において、学生の文章産出能力が高まっているかを明らかにするために、大学の初年次教育担当教員、高校の国語担当教員に評価を依頼し、1年間の評価の変動から、各学生の文章の変化を分析する。

## 3. 研究の方法

本研究課題では、大学初年次生にパソコンで1200字程度の作文を書いてもらい、執筆後にオンラインでインタビューをするという調査を行った。調査協力者は、2020年度、2021年度に大学に入学した初年次生である。調査で収集した資料を使用して、分析を行った。

### 3.1 調査の概要

#### 1) 作文の執筆

作文の執筆過程を明らかにするため、執筆時のキー操作を記録できるアプリケーションを使って作文を書いてもらい、作文の構成を考える際にアウトラインを書く場合にも、アプリケーション内の「メモ欄」を使用するように指示した。執筆が終了した作文は、執筆過程のデータとともに、メール添付で調査実施者に提出してもらった。調査協力者が執筆した作文は次の4種である。以下に、調査協力者への指示文とともに示す。

作文1:(体験文)「うれしかったプレゼント」

あなたがもらってうれしかったプレゼントは何ですか。教えてください。

作文2:(説明文)「私の好きな有名人」

あなたが好きな有名人はどんな人ですか。その有名人を知らない人に紹介してください。

作文3:(意見文1)「写真と動画」

思い出を残すとき、写真と動画のどちらがいいと思いますか。理由も書いてください。

作文4:(意見文2)「最強の生物」

地球上のすべての生き物が同じ大きさだとしたら、一番強い生き物は何だと思いますか。理由も書いてください。

4種の作文のテーマは異なる性質のものになるように設定した。当初想定していた3種ではなく、1種増やしたのは、テーマのバリエーションを増やすためである。作文1は、自分の体験について書くものであり、自分にとって身近な内容のため、書きやすいであろうと判断し、1回目の作文のテーマとした。読み手に伝わるように書くためには、自らの体験を整理することが必要になる。作文2は、自分が好きな有名人について説明するものであり、なぜ好きなのかという理由を挙げながら書くことが求められる。「その有名人を知らない人に紹介してください」という指示をすることで、取りあげる有名人のどの側面を伝えるべきなのかを考える必要が生じるようにした。

一方、作文3と作文4は自分の意見を書く作文である。まず、作文3は、思い出を残す方法として「写真」と「動画」のどちらがよいかという二者択一の意見を述べるものである。二つの選択肢を対照させながら、なぜ一方を選び、もう一方を選ばなかったのかについて述べることが求められる。それに対して、作文4は、「生物」という広い範囲から自分が最強だと思うものを取りあげるものであり、選択肢が限定されていない点が作文3とは違う。なぜ自分が取りあげた生物が最強だと思うのかを示すために、比較対象としてどの生物に言及するのかなども考える必要がある。

本研究課題では、研究期間の初年度にコロナウイルス感染症の感染拡大があり、大学の学事日程の変更やオンライン授業の実施などがあったため、当初想定していたような調査協力者の募集ができず、入学直後の調査実施は行うことができなかった。また、調査協力者の負担をできるだけ軽くすることを考えて、厳密な締切は設けず、自宅で時間があるときに執筆する形としたため、調査協力者によって、執筆にかけた時間は異なる。そこで、「2. 研究の目的」の(2)に示した学生の文章の変化を見るための資料として、各作文の執筆後に、アンケートを送り、前の作文執筆後から次の作文執筆までの間に授業で習ったことなどを記入してもらった。

## 2) 執筆した作文に関するインタビュー

各作文の執筆終了後、オンラインで作文に関するインタビューを行った。概ね作文の執筆終了後、1~2週間の間に実施した。インタビューを実施する前に、調査者が作文の執筆過程のデータを確認し、執筆中の修正箇所や一定時間キー操作がない箇所などを特定した。そのうえで、インタビューで執筆過程の記録のExcelファイルを画面共有し、執筆時の表現選択や表現修正などを中心に、作文の該当箇所を調査協力者に示しながら質問した。主な質問の内容は下記のとおりである。

### <画面共有前>

- ・最初にテーマを聞いたときにどう思ったか
- ・今回のテーマは書きやすかったか
- ・(2回目以降)これまでのテーマと比べて書きやすかったか
- ・1200字という文字数についてどう感じたか

### <画面共有開始後>

- ・作文を書き始める前に、作文の構成がどの程度できあがっていたか
- ・作文の終わり方が決まっていたか
- ・(書き出しの1文について)なぜこの書き出しにしたのか
- ・(修正した箇所について)なぜ修正したのか
- ・(新たに表現を挿入・付加した箇所について)なぜ挿入や付加をしたのか
- ・(語順や文の順番を入れ替えた箇所について)なぜ入れ替えたのか
- ・(一定時間キー操作をしていない箇所について)なぜ手が止まっているのか
- ・(一定時間キー操作をしていない箇所について)どんなことを考えていたのか
- ・(一定の分量を書く間、修正や挿入・付加等をしていない箇所について)

この箇所を書いている間、意識していたことはあるか

- ・最後まで書き上げた段階で全体を読み直したか

### <画面共有終了後>

- ・今回の作文を書いた感想はあるか

画面共有前にテーマや文字数に関する質問をしたのは、ライティングの授業で課題として課す文章のテーマ設定等について検討するためである。

執筆過程を画面共有したあとは、執筆の過程に沿って、修正箇所等について、その理由を中心に質問した。修正箇所以外にも、書き出しの文や一定時間キー操作がない箇所についても質問した。書き出しについて質問したのは、文章全体の構成を見据えて書き始めているかを確認するためである。また、一定時間キー操作をしていない箇所について質問したのは、そこで手を止めてすでに書いた部分の見直しやそのあとの展開の検討などを行っている可能性があるためである。さらに、書き出しの一文を書いてから書き終わるまでの意識を細かく確認するため、一定の分量を書く間、修正や挿入・付加等をしていない箇所についても質問した。これは、修正箇所に関する質問だけだと、一定の間修正がない箇所について何も質問をしないことになってしまい、その間に調査協力者が考えていたことを聞けなくなるからである。最後に、推敲をしているかどうかを確かめるため、書きあげたあとに全体を読み直したかを尋ねた。

### 3.2 分析資料

本研究課題では、1) 調査協力者が書いた作文とその筆記過程、2) 1) の作文に関するインタビューの談話、3) 作文執筆後のアンケートを分析資料とした。

#### 1) 調査協力者が書いた作文とその筆記過程

調査協力者が書いた作文はテキスト(.txt)ファイル、執筆過程は Excel (.xlsx) ファイルで保存した。4 回目の作文まですべて執筆した調査協力者は、2020 年度入学者 20 名、2021 年度入学者 24 名の計 44 名である。

#### 2) 作文に関するインタビューの談話

作文執筆後のインタビューは録音して文字化をし、分析資料とした。

#### 3) 作文執筆後のアンケート

作文執筆後にアンケートの記入を依頼し、作文のテーマが書きやすかったか、前回の作文執筆から当該作文の執筆までの間に文章表現等について授業で習ったか、習ったとすればどんなことを習ったかを尋ねた。

### 4. 研究成果

各年度ごとの成果は次のとおりである。

2020 年度は、文章執筆調査を実施し、データの収集を行った。調査の方法は 3.1 で述べたとおりである。2020 年度に収集できた作文のうち、問題が見られる作文 1 例、よくまとまっている作文 1 例の執筆過程および執筆者へのインタビューのデータを分析し、学会において口頭発表を行った。問題が見られる作文には、はじめは文法的に問題がない表現を書いていたにもかかわらず、文の主題の部分だけを見て修正したため、結果として主述がねじれてしまった文が見られた。それに対して、よくまとまっている作文では、後続の内容を考えて接続表現をたしたり、その接続表現に対応した文末にしたりするなど、執筆中の箇所の前後の広い範囲を考えて執筆している様子が見られた。これらのことから、執筆中に意識している文章の範囲が狭いために主述のねじれなどの問題が生じている可能性が示唆された。

2021 年度は前年度に行ったデータの収集を継続した。データ収集を継続するにあたって、前年度中に調査を終えられなかった学生に加えて、2021 年度に大学に入学した 1 年生を新たに調査協力者として募集した。また、2020 年度に収集したデータも含めて、データの整理・分析を行った。

2022 年度は、作文の執筆過程および執筆後のインタビューの分析を行い、大学初年次生の作文執筆過程から得られる文章表現指導への示唆と文章課題の設定に関する成果をまとめて発表した。前者の文章表現指導への示唆については、作文 3 の意見文を取りあげ、作文の冒頭の文から順にその執筆過程を分析した。その結果、調査協力者が次のような修正を行っていることを指摘した。

- 自分の意見を書いた文を控えめな表現にしたり、個人的な意見であることを明示したりする
- 情報を加えて内容をより具体的にする
- 文の長さを意識して文を分ける
- 文章全体の表現の統一などのために、すでに書いた箇所に戻って修正する

この結果から、意見文の執筆において、客観的に意見を記述するよう指導する際、このような学生の心理に留意すること、情報を加えたり、文を分けたりする際に文のねじれなどが生じないように学生に意識させることの重要性を指摘した。

後者の文章課題の設定については、授業で課す文章課題の設定について考察するため、4 種の

作文それぞれの執筆後に行ったインタビューから、学生が作文の文字数、テーマに関して述べた内容を抽出し、分析を行った。その結果、作文1の自分の体験に関わるテーマについては、書く内容がすぐに思いつくことから書きやすいと感じる調査協力者がいる一方、自分の心理についての描写を書くことに書きづらさを感じ、根拠に基づいて自分の意見を示す文章のほうが書きやすいと述べる調査協力者が見られた。また、書きやすさを感じている調査協力者であっても、1200字という文字数の多さへの言及があった。作文2の好きな有名人の説明については、よく友だちと話す内容で慣れている話題であることから書きやすいと述べる調査協力者がいる一方、「有名人」の解釈に悩み、取りあげの人を決めかねた様子が見られた。また、「知らない人に説明する」という指示を意識して作文の構成を考えたことへの言及もあった。作文3の意見文については、自分の意見が決められないことで書きづらさを感じた調査協力者もいたが、大学のレポートに似たような形式のテーマで書きやすいと述べる調査協力者もいた。作文4は、作文3と比べて、選択肢が多いことが書きやすさにつながっている様子が見られたが、生物に関する知識が必要なことで書きにくさを感じていた調査協力者もいた。また、「最強」の定義に悩んだという意見もあった。以上から、下記のことを指摘した。

内容が思いつきやすいこと、話題に慣れていることが書きやすさを感じさせている

テーマと文字数のバランスを考慮する必要がある

必ずしも、自分に関することを書く文章を書きやすいと思う学生ばかりではないため、基礎的な文章力を伸ばす目的でのテーマ設定の際はそのことを考慮する必要がある

テーマ(指示文)が理解できるように支援する、あるいは、テーマに使用する語を細かく説明する必要がある場合もある

意見文でも、意見の自由度、範囲によって、執筆の難易度が変わる

また、中等教育における国語教諭の経験者および大学の初年次の日本語科目担当者計5名に、調査協力者44名の1回目の作文の評価を依頼し、5段階評価の評点と評価の理由を評価シートに記入してもらった。44名分のうち、3名分については、2回目から4回目の作文についても評価を依頼した。1回目から4回目までのすべての作文の評価を行った3名分について、作文1から作文4になるにしたがって評価が高くなるような結果は得られなかった。

本研究課題の成果を、「2. 研究の目的」にしたがって整理すると次のようになる。

#### (1) 大学初年次生の文章に問題が生じる原因の解明

大学初年次生の作文には、主述のねじれなどの問題がある文が見られた。また、執筆過程においては、情報を加えたり、文の長さを調整したり、すでに書いた部分を執筆中に見直し修正したりしている。その際に、意識している範囲が狭いと、前後のつながりが悪かったり、対応がとれていなかったりする文章を書く可能性が高くなるのではないかということが示唆された。また、意見文については、自分の意見をどこまで客観的なものとして主張するかについて気にしている学生がおり、そのような学生の存在に留意して指導する必要がある。

また、授業における文章課題の設定については、その目的におうじて変える必要があるが、基礎的な文章力改善を目指した課題であっても、単に身近なテーマにすればよいということではなく、意見が浮かびやすいように支援しながら、意見文を課題とすることなども必要であると考えられる。

#### (2) 初年次1年間における学生の文章の変化の解明

この目的については、当初想定していた時期の資料収集ができなかったため、十分な分析に至らなかった。しかし、国語教諭の経験者と日本語科目担当者に依頼した評価からは、執筆の時期よりも文章のテーマによって評価が変わることが推察される。(1)の目的で述べたような、学生による「書きやすいテーマ」の違いに留意しながら、評価の分析を行うことが今後の課題となる。

以上、研究期間全体を通じた本研究課題の成果について述べた。評価の分析、および、研究成果に基づいた教育実践の方法を検討することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中啓行	4. 巻 53
2. 論文標題 大学1年生による意見文執筆の過程をたどる試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央学院大学人間・自然論叢	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中啓行
2. 発表標題 大学1年生が文章を執筆する過程の分析の試み - 執筆中の修正を中心に -
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第9回関東・甲信支部大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中啓行
2. 発表標題 大学1年生が文章のテーマから受ける印象－体験文・説明文・意見文を資料として－
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第11回関東・甲信支部大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 井下 千以子、大島弥生、福博充、関田一彦、高橋薫、杉谷祐美子、柴原宜幸、成瀬尚志、小山治、佐藤広子、小林至道、中竹真依子、嶋田大海、岩崎千晶、佐渡島紗織、小笠原正明、山地弘起	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 298
3. 書名 思考を鍛えるライティング教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石黒 圭  (Ishiguro Kei)  (40313449)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・教授   (62618)	
研究分担者	大島 弥生  (Oshima Yayoi)  (90293092)	立命館大学・経営学部・教授   (34315)	
研究分担者	田島 ますみ  (Tajima Masumi)  (90534488)	中央学院大学・法学部・教授   (32505)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------